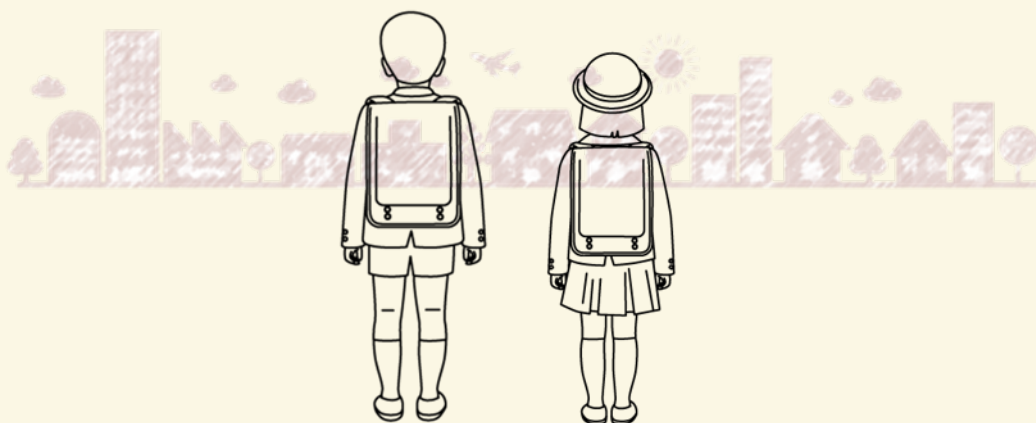


# 放課後児童クラブ安全管理ガイド

## 放課後の安全をみんなで守るための 「危険回避能力」



近年、気候変動による気温上昇に伴った夏の活動の制限や、少子高齢化に伴う地域コミュニティの変化や安全志向の高まり、遊び場や遊ぶ時間の減少、ICTの普及による遊び方の変化など、子どもを取り巻く環境は大きく変わりました。放課後児童クラブでは、こうした環境の変化による影響も受ける中で、身体を動かして体力を培ったり、危険を判断する機会が減少し、重大事故につながるリスクが高まっていると考えられます。また、夏の活動における熱中症対策への気配りも、一層求められるようになっていきます。

安全な居場所づくりの第一歩は、確実な「安全環境整備」にあります。マニュアル整備や安全点検にもとづく安全環境の確保、事故防止に取り組む職員の資質向上、体制・配置の見直しなど、子どもの安全を守るための対策の徹底は、放課後児童クラブの責務です。

しかし、それだけでは事故を完全に防ぐことはできません。事故は、大人や子どもが予測しなかった、ほんの些細な環境変化の中で起こっています。中には、子どもが大人の予測を超えた行動をとって、事故につながる例もあります。事故防止に向けては、環境面の対策だけでなく、子ども自身が危険を判断し、その危険から身を守る「危険回避能力」が重要で、その能力を高めるアプローチが不可欠です。

育成支援を通じて、子どもの危険回避能力を育むとともに、放課後児童支援員自身の危険予測・対応スキルも向上させること。—これらを通じて、子どもが安心してチャレンジできる環境をつくり出し、一人ひとりと集団全体の生活をより豊かなものにしていきましょう。

# 放課後児童クラブとして徹底すべき安全管理 —組織で取り組む事故防止

## ■ 放課後児童クラブで起きている重大事故のリアル

放課後児童クラブでは、日々の遊びや生活の中で、様々な事故が起きています。遊具からの転落、ボール遊び中の衝突、室内での転倒…。一見「どこにでもある」場面の中で、骨折や頭部の外傷など、重大な結果につながる事故も少なくありません。

近年の事故事例データを見ても、放課後児童クラブでの事故件数は増加傾向にあります。

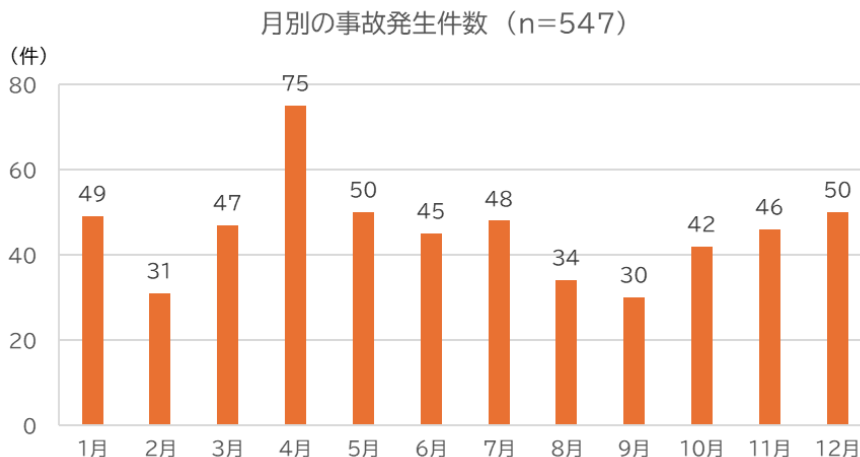
具体的には、特に次のような場面で事故が多く発生していることがわかります。

### ▶ 放課後児童クラブで起こる重大事故の傾向

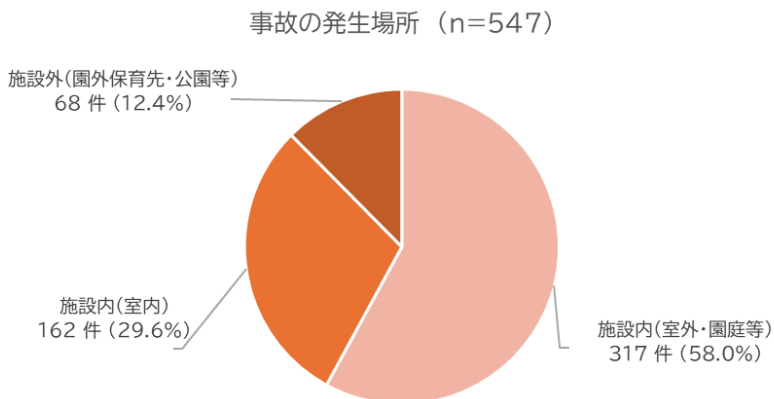
(令和5年度の「教育・保育施設等における事故情報データベース」より)

※以降の事故情報の説明では、「教育・保育施設等における事故情報データベース」の用語をそのまま用いています。

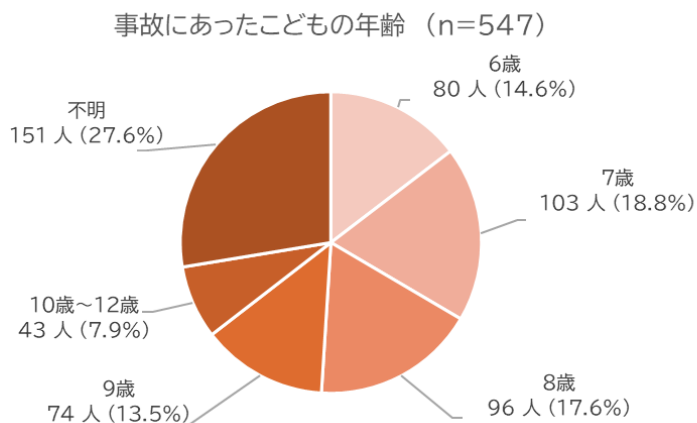
時期:特に4月に事故の発生件数が多くなっています。



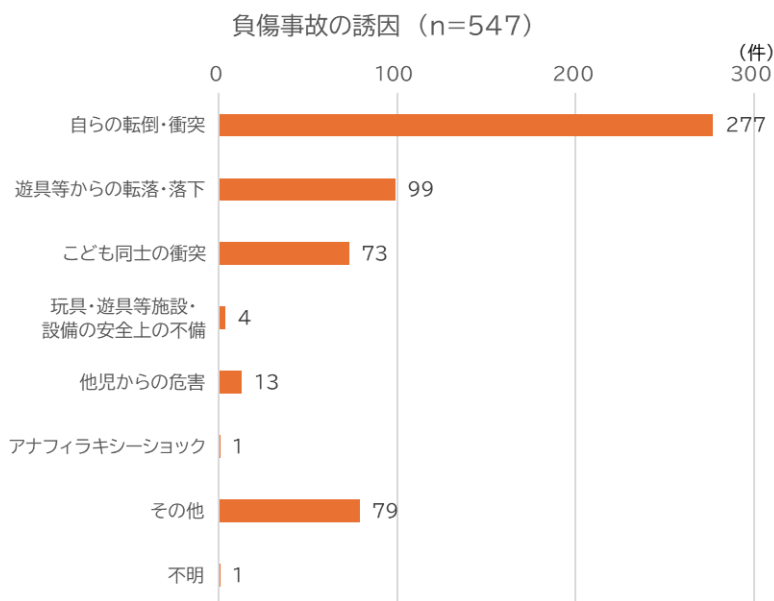
発生場所:施設内(屋外)での事故が半数以上となっています。



事故にあったこどものうち、低学年児童の占める割合が高くなっています。しかし、放課後児童クラブの登録児童はもともと低学年が多数を占めていることや、学年が上がるにつれて大きなケガを回避できる行動がとれるようになる可能性も考慮すると、この割合の高さは、必ずしも低学年の事故リスクの高さを示すものではありません。



事故の内容として、「転落・落下」「自らの転倒・衝突」「こども同士の衝突」が多くなっています。前述のとおり、放課後児童クラブで事故にあったこどもの年齢は低学年が多いですが、高学年にあたる10歳から12歳のこどもも、身体能力が高くなり様々な遊びをするようになる中で、危険な動作を伴う遊びによって怪我をしてしまうことがあります。



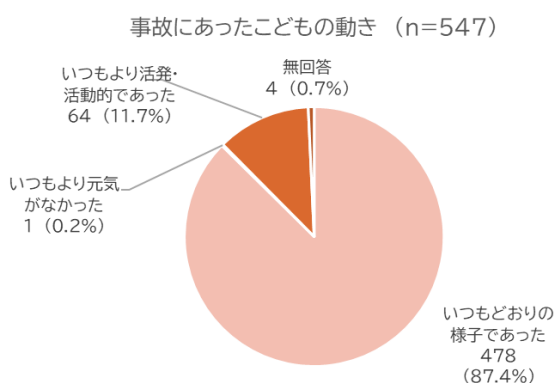
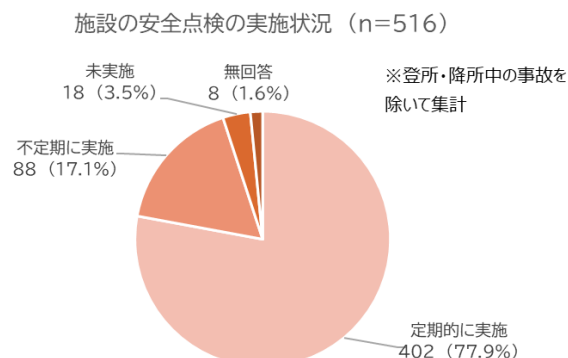
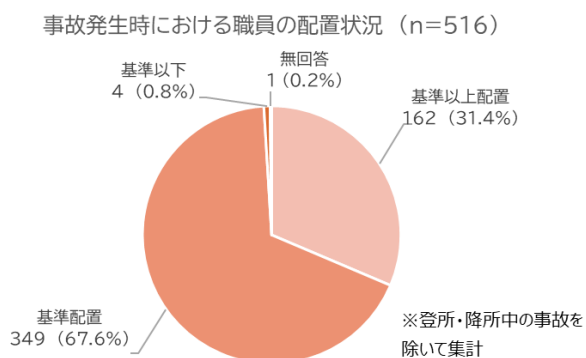
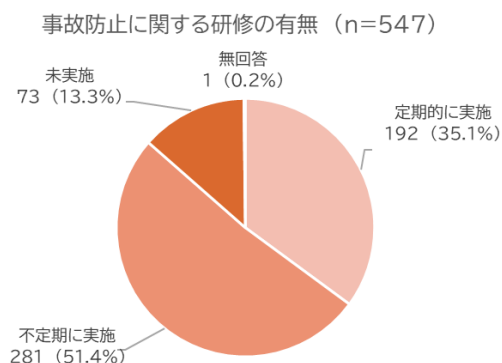
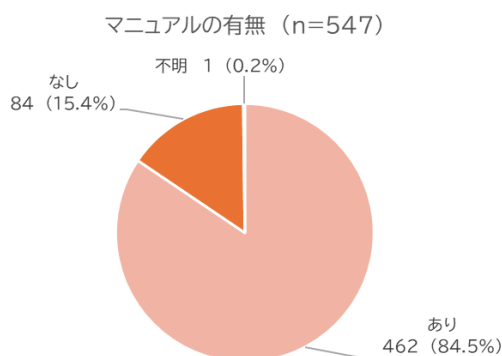
**高学年の児童における事故の発生状況事例:**

- ・大型遊具のすべり台を立ったまま降りようとしたところ、謝って転落。
- ・鬼ごっこ中、ジャングルジムへ逃げ込み、他児との接触を避けようとしたところ、足を滑らせて高所から転落。
- ・スポーツ遊具(綱渡り)で遊んで居たところ、バランスを崩して落下。

(注)こども家庭庁に報告された事故情報をもとに、みずほリサーチ&テクノロジーズ作成

こうした事故は、必ずしも事故対策が不十分な状況下や特別な環境・危険行動のもとで起こっているわけではありません。「対策を施した状況下」かつ「いつもの遊び」「いつもの環境」の中で起きていることが、多くのデータから読み取れます。





他方で、「マニュアルを整備していない」「安全点検を実施していない」「研修を実施していない」等の環境下で重大事故が発生したケースが一部で見受けられます。事故防止のための組織的な対応強化が求められます。







## 放課後児童クラブで起こる典型的な事故のパターン(例)

### 【屋外】





#### パターン1:雲梯や鉄棒で手が滑って落下

発生状況 >>	事故の瞬間 >>	結果 >>	負傷内容
			
外遊びの時間に、こどもが雲梯や鉄棒で遊んでいる。	手に汗をかいていたり、握力が低下してきたタイミングで、無理にぶら下がったり、一段飛ばし(雲梯)をしようとする。	体を支えきれずに落下し、地面に手や肘を強くついてしまう。	手首の骨折、肘関節の脱臼や骨折など。

#### パターン2:ドッジボールやサッカー中の接触・転倒




発生状況 >>	事故の瞬間 >>	結果 >>	負傷内容
			
校庭などで、集団でドッジボールやサッカーを行っている。	ボールを夢中で追いかけている際、または飛んできたボールを避けようとした際に、ボールを踏んでしまったり、他のこどもと衝突したりしてバランスを崩す。	転倒し、とっさに手を強く地面につく、あるいは足首を強くひねる。	手首の骨折、足首捻挫など。

#### パターン3:鬼ごっこ中の急な方向転換や障害物による転倒




発生状況 >>	事故の瞬間 >>	結果 >>	負傷内容
			
外遊びの時間に、校庭などで鬼ごっこをしている。	鬼から逃げようとして、後ろを振り返りながら走ったり、急激な方向転換を行ったりする。その際、地面にある障害物(タイヤ、ロープ、段差など)に気づかずにつまずく。	受け身を取れずに転倒する。	腕の骨折、顔面の打撲・擦傷など。

## 【屋内】




### パターン1:室内での鬼ごっこなどによる設備への衝突・転倒

発生状況 >>	事故の瞬間 >>	負傷内容
 遊戯室、廊下などの屋内で、遊びの延長で追いかけてっこになったり、移動のために走っている。	 勢いよく走っている最中に、置いてある道具や荷物(紙、リュック、水筒、毛布等)で滑ったり躓いたりして転倒し、机や椅子の脚、ロッカーの角、ドア枠などに頭や足の指をぶつける。	 腕の骨折、顔面の打撲・擦傷など。

### パターン2:無理な体制での遊びによる転落

発生状況 >>	事故の瞬間 >>	負傷内容
 室内で側転やおんぶ、プロレスごっこなどを行っている。	 不安定な体勢からアクロバティックな動き(側転やおんぶ)をして支えきれずに崩れ落ちる。	 腕、手首の骨折など。

### パターン3:椅子・机・積み木などを遊びの道具として使用する中での転落

発生状況 >>	事故の瞬間 >>	負傷内容
 自由遊びの時間に、室内にある椅子、机、大型積み木、窓枠などに乗って遊んでいる。	 不安定な物の上に立ち上がってバランスを崩す、または窓枠から落ちる。	 腕、手首の骨折など。

## ■ あなたの放課後児童クラブは大丈夫？ 重大事故から学ぶ、安全環境整備の6つの観点

放課後児童クラブでは、こども一人ひとりと集団全体の生活を豊かにしていくために、育成支援を通じて「こどもが安全に安心して過ごすことができるように環境を整備し、緊急時には適切な対応ができるようにしておくこと」が求められています。

### 第3章 放課後児童クラブにおける育成支援の内容 1. 育成支援の内容

⑧こどもが安全に安心して過ごすことができるように環境を整備するとともに、緊急時に適切な対応ができるようにする。

こどもが自分で避けることのできない危険に遭遇しないように、遊びと生活の環境について安全点検と環境整備を行う。

こどもにとっての危険の種類や内容と、それらに対応するこども自身の能力は、年齢や発達の状況によって変化します。こどもの安全を守るためには、こどもが予測できず、どのように対処すればよいかの判断が不可能な危険(ハザード)に対して、未然に排除できるような対応や管理の方法を考慮しておくことが必要です。

事故やケガを未然に防ぐためには、屋内外の施設設備等の衛生や安全を点検し、遊びや生活が衛生及び安全の確保された環境で行われるよう整備することが必要です。衛生や安全管理に関する点検は、点検項目や点検頻度、点検者を定め、定期的に行います。なお、点検対象とする環境には、近隣の公園に行く場合や散歩、遠足等、放課後児童クラブの外で活動する場合も含まれます。

更に、地域の中でこどもが安全に過ごせるように支援する上では、家庭から学校、学校から放課後児童クラブ、放課後児童クラブから家庭等、こどもの主な行動範囲を中心とした地域の中でこどもの行動や環境を把握することも求められます。

こども家庭庁「放課後児童クラブ運営指針解説書」

事故防止は組織で対応すること、つまり施設・事業所の長等のリーダーシップのもとで、対策に取り組むことが必要です。放課後児童クラブで実際に起きている重大事故の事例を踏まえて、安全環境整備のチェックポイントを考えるための6つの観点を整理しました。

#### 安全環境整備のチェックポイントを考えるための、6つの観点

- ① 安全を確保するための環境整備
- ② 職員の資質向上
- ③ 職員体制・配置の見直し
- ④ こどもの発達段階に応じた対応
- ⑤ 非日常場面における対応
- ⑥ 事故発生時における対応

なお、安全管理の徹底や環境整備が、「こどもの遊びを制限すること」になってしまえば、本来の目的からずれてしまいます。安全環境整備は、こどもの活動を支え、やりたい遊びを安心して楽しめるようにするためのものです。「禁止」「ダメ」を増やすことが目的ではないことを、放課後児童クラブ全体で改めて認識することも大切です。



## ▶6つの観点に基づく、安全環境整備のためのチェックポイント(例)

以下は、6つの観点に基づく安全環境整備のためのチェックポイントの例です。放課後児童クラブの事故防止に向けた安全管理の体制整備を行うための参考にしてください。

※これらは「教育・保育施設等における事故情報データベース」から、令和5年中に発生した放課後児童クラブにおける重大事故に関する事故報告書の内容を整理・分析した結果を踏まえたものですので、全ての施設・事業所に当てはまるものではありません。各施設・事業所の実情(こどもの人数、年齢、構成、施設設備の状況、職員体制等)に応じた対策を検討してください。

### ①安全を確保するための環境整備の観点から

「マニュアルがない」「安全点検をしていない」といった状況で重大事故が起きた事例があります。また、マニュアルがあっても内容が「事故の予防」に偏っていて、「起きた後にどう動くか」が書かれていなかったために、対応が遅れてしまったケースもあります。

事故は、いつもの活動や慣れた場所であっても、ちょっとした見守りの隙や、環境の変化によって起こります。点検やマニュアル整備はもちろんのこと、クラブ内の「どこが危ないか」を職員間で確認し合い、具体的な対策をとることも大切です。

#### 【チェックポイント(例)】

◆ 遊具や設備の点検実施を徹底していますか。

- ・ 「毎年やっているから」「点検項目が同じだから」等の理由で点検未実施になっているケースはないでしょうか。
- ・ 点検項目は、定期的に見直していますか。
- ・ 特に危険な箇所は、具体的・重点的に点検を行えるようになっていますか。

◆ 安全管理や非常時対応に係るマニュアルを整備していますか。

- ・ 「予防」だけでなく「発生時の対応」についてもマニュアル化していますか。
- ・ マニュアルの内容は、定期的に見直していますか。
- ・ 内容を理解し、実際に動けるようにするための職員間での説明や訓練の機会は設けられていますか。
- ・ マニュアルの内容のうち、子どもへの共有・徹底が必要な部分は確実に周知されていますか。

◆ 危険な箇所(段差・角・すべりやすい床など)や、支援員から見えにくい「死角」をなくすための対応を行っていますか。

- ・ たとえば、以下のような対応が考えられます。
  - ※ 段差にテープや注意喚起の表示を貼る
  - ※ ロッカーや机の角にコーナーガードを取り付ける
  - ※ 滑り止めのマット等を敷く
  - ※ 定期的な清掃を行う
  - ※ 死角が生まれにくい活動場所を選択する
  - ※ 机や棚等の高さを低くして、視界を確保する

## ②職員の資質向上の観点から

重大事故が起きたケースの中には、「事故防止の研修を行っていなかった」という報告がみられます。また、研修を行っていても、不定期であったり、一部の職員しか参加していなかったりすると、せっかくの学びが現場で活かされません。

こどもの安全を守るためには、職員一人ひとりのスキルアップが欠かせません。**定期的に研修を行うだけでなく、学んだ内容をクラブ全体で共有し、日々の活動で実践できる仕組みを作る**ことが大切です。

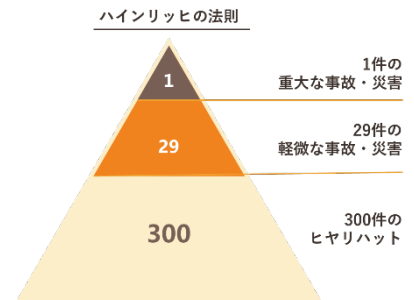
### 【チェックポイント(例)】

- ◆ 安全管理や事故防止に関する研修に、定期的に参加していますか。
  - ・ そこで得た知識を、クラブ内で共有し、定着を図る機会がありますか。
- ◆ 研修で学んだ内容を、日々の育成支援に活かすための具体的な工夫(チェックシート、掲示、ロールプレイなど)は用意されていますか。
- ◆ 職員会議等で「ヒヤリハット(ヒヤツとしたこと・ハツとしたこと)」を共有し、原因と対策を一緒に考える場がありますか。
- ◆ 自治体等からの安全に関する周知・啓発について、職員間で共有できていますか。
- ◆ 放課後児童クラブの安全対策や事故防止のための対応について、保護者とも共有していますか。

### ◆ヒヤリハットとは？◆

「ヒヤリハット」とは、危ないことが起こったが、幸い事故等には至らなかった事象のことです。

ハインリッヒの法則(1:29:300の法則)によると、1件の重大事故の裏に、29件の軽傷事故、300件の無傷事故(ヒヤリハット)があるとわれています。逆にいうと、経験したヒヤリハットをもとに危険の認識を深め対策を講じることで、重大事故のリスクを低減することが可能です。



### 【放課後児童クラブで起こりうるヒヤリハットの例】

- ◇ 校庭から施設内に戻るため、こどもたちは順に列になって歩いていた。前方、後方に放課後児童支援員がいたが、こども同士のトラブルにより個々の対応に追われ、本児がいないことに気づけなかった。校庭にいた学校関係者から連絡があり、本児が校庭に残っていることがわかった。
- ◇ 屋外で遊んでいる時、本児がフェンスのレバーを触っていたところ外れて隙間ができ、外へ出ようとしていた。職員がすぐに気づいて本児に追いつき、連れて戻った。
- ◇ 廊下を走っていたこどもが、曲がり角で別のこどもとぶつかりそうになった。双方が急ブレーキをかけて衝突は避けた。

それぞれの放課後児童クラブにおいても、こども自身が遭遇したヒヤリハットを共有してみましょう。そのうえで、ヒヤリハットがなぜ起こったのか、それはどのような対策を講じることで防げるのかを考え、実践することが、重大事故の起こりにくい環境づくりにつながります。重大事故の多くは日常の些細な環境・状況変化の中で起こっていますので、些細と思えることほど重要な意味を持つ場合があります。小さな気づきにもためらわずに、組織内で報告し合うことが必要です。

### ③職員の体制・配置の見直しの観点から

事故の多くは、「他のこどもの対応をしているとき」や「活動の切り替わりで移動しているとき」など、ふとした瞬間に起きています。人数としては職員が充足していても、こどもが動く場面では目が行き届かなくなったり、死角ができていたりすることがあります。こども全体を見渡せる配置や、誰がどこを見るかという役割分担をしっかりと決めておくことが重要です。

#### 【チェックポイント(例)】

- ◆ 予想外の事態が起きた場合でも、こども全体を見渡せるような職員配置になっていますか。
- ◆ 行事や外出時など「いつもと違う」状況での体制について、あらかじめ検討されていますか。

### ④こどもの発達段階に応じた対応の観点から

放課後児童クラブには年齢も体格も運動能力も違う、様々なこどもたちが集まっています。「高学年の強いボールを低学年が受け止められなかった」「高学年の危険な遊びを低学年が真似した」「低学年がはしゃぎすぎて周りが見えなくなっていた」といった場面で事故がよく起きています。一人ひとりの発達段階に合わせて、適切な見守りや声かけを行うことが大切です。

また、「大型ブロックの上に乗る」「滑り台を駆け上がる」など、遊具の誤った使い方による転落事故も多くみられます。実際に起きた事故やヒヤリハット事例をこどもにも伝えながら、一緒に遊び方のルールを作り、繰り返し確認していきましょう。



#### 【チェックポイント(例)】

- ◆ こどもの発達段階(年齢、体力、技量等)に応じた対応について、放課後児童クラブ内で検討されていますか。職員全員が理解し、それを実践できていますか。
- ◆ 遊び方に関するルールや注意点は、こどもにわかりやすい形で伝えられていますか。
  - ・ その日・その場にはいないこどもも含めて全員に対し、繰り返し確認されていますか。

## ⑤非日常場面における対応の観点から

施設外等での特別なイベントは、いつもと勝手が違うため、職員の配置や危険の予測が難しくなります。子どもたちも興奮しやすいため、思わぬ事故が起きるリスクが高まります。ひとたび事故が起きると、取り返しのつかない結果になることもあります。実際に、過去の重大な事故の多くは、プールや外出先での活動など「いつもと違う活動」の最中に起きています。

こうした活動を行うときは、事前の下見や綿密な計画づくり、職員をどう配置するかの検討、もしもの時の対応手順の確認を徹底しましょう。また、計画内容は保護者にもしっかり説明し、理解と同意を得たうえで実施することが大切です。

### 【チェックポイント(例)】

- ◆ 施設外活動やイベント時には、事前の下見と下見の結果に基づくリスクの洗い出しを行っていますか。
- ◆ 当日の職員配置や動線、子どもの人数に応じた安全確保の計画は十分でしょうか。
- ◆ 活動ルールを決め、その内容とルール順守の重要性を子どもと共有していますか。
- ◆ 保護者に対して、活動内容やリスク、配慮事項について丁寧に説明し、同意を得ていますか。

## ⑥事故発生時における対応の観点から

万全な事故防止策を講じても、事故の発生を完全に防ぐことはできません。そのため、事故が起きてしまった後の対応も大変重要です。

重大事故の際、「直後は痛がっていなかったため異変に気づくのが遅れた」「怪我をしたことは知っていたが、その後の様子を見ていなかった」といった、対応の遅れや不十分さが指摘されるケースがあります。

事故が起きた時の対応手順や役割分担をはっきりと決め、いざという時に迷わず動けるよう、訓練をしておくことが大切です。また、事故が起きた際の行動や対応フローについて、子どもや保護者と共有しておくことも必要です。

### 【チェックポイント(例)】

- ◆ 応急処置のための備品等がどこにあるか、どのように使用すれば良いか、職員全員が確実に理解していますか。
- ◆ 事故発生時の処置や連絡のフロー、役割分担は明確になっていますか。子どもは、誰に何を伝達すれば良いか、理解していますか。
- ◆ 事故発生時の保護者への連絡の判断基準、連絡先と連絡内容、対応フローは定められていますか。それを保護者にも共有していますか。
- ◆ 事故が発生した際・発生後に(対象児以外を含めた)子どもの心身の安全を守るための対応フロー・内容は、検討されていますか。
- ◆ 実践を想定した訓練は行っていますか。

学校との連携は、こどもの安全環境整備の観点でも大変重要です。放課後児童クラブ運営指針解説書では、学校等との連携について、以下のように述べています。

#### 第5章 学校及び地域との関係 1. 学校等との連携

(1)こどもの生活の連続性を保障するために、情報交換や情報共有、職員同士の交流等によって学校との連携を積極的に図る。

放課後児童クラブに通うこどもは学校、放課後児童クラブで1日の多くの時間を過ごしています。放課後児童支援員等は、こどもが日々の生活を円滑に過ごすことができるよう、安全面も含めて学校と情報交換や情報共有をし、こどもの生活の連続性を保障する必要があります。

学校との連携を図るためには、放課後児童クラブの事業案内や行事の予定、放課後児童クラブに在籍するこどもの名簿等を届けるなどして、放課後児童クラブでの生活の様子を学校に伝えます。そして、学校から授業時間や年間行事の予定と学校だより・学年だより等を知らせてもらいます。特に1年生については、環境の変化が大きいことを考慮して、4月当初は緊密な連携を図ることが大切です。

学校からの下校時刻に加え、学校行事等の予定もあらかじめ把握することは、下校後のこどもの心身の変化に気づき、細やかに対応できるようにするためにも必要なことです。また、こどもが放課後児童クラブに来所する予定だったのに来ていない、体調が優れないなど、何か変化や問題が生じた際には、学校とすぐに連絡調整ができる関係を構築しておくことが求められます。(後略)

こども家庭庁「放課後児童クラブ運営指針解説書」

なお、放課後児童クラブを小学校内で実施する場合、運営の主体に関わらず、こどもの安全確保に対する責任は放課後児童クラブが負うことが原則です。その責任を果たすため、学校との間で以下の点を含む安全管理に関する連携体制を構築する必要があります。

- ◆ 責任の明確化：施設管理や安全確保における学校と放課後児童クラブの責任範囲を文書等で明確にします。
- ◆ 安全計画の共有と連携：施設・設備の利用ルールを定めると共に、安全点検や避難訓練の計画を共有します。
- ◆ 緊急時対応の確認：事故発生時の連絡体制、対応手順を確認・共有します。

## 育成支援における留意点 ―こどもの「危険回避能力」を育む

### ■ なぜ「危険回避能力」が必要？

大人が安全な環境を整え、マニュアルを整備し、研修で知識やスキルを身につけることは、事故防止の土台として欠かせません。しかし、それだけでは事故を完全に防ぐことはできません。

その理由のひとつとして、こどもの行動や心理は、ときに大人の予測を超えてくるからです。

また、「何が危険か」「どこまで大丈夫か」という感覚は、大人とこどもでは大きく異なります。大人から見れば「危ないからやめてほしい」行動も、こどもにとっては「楽しくてワクワクする遊び」に見えていることが少なくありません。

さらに、同じ環境であっても、天候の違い、遊びの内容、こどもの人数や職員配置、その日のこどもの体調や気分などによって、状況は変化します。その些細な変化が、事故につながります。

実際に、放課後児童クラブで起こった重大事故の要因を分析すると、次のような傾向がみられます。

#### 放課後児童クラブで起こる重大事故の要因(令和5年度の「教育・保育施設等における事故情報データベース」より)

- ・ 施設や遊具そのものの不備を指摘する意見は少なく、今後の対応策としても「これまでの対応を継続」「特に追加の対応策はない」との意見が多くみられました。
- ・ 危険予測と対策(いつもと異なる状況・環境下で起こりうる危険、遊びに内在するリスクの予測と備え)が不十分であったとの指摘が多くみられました。
- ・ 遊び方に関するルールの徹底や注意喚起が不足していたとの指摘が多くみられました。
- ・ 興奮や疲労、治癒明け、行事のあとの来所や久しぶりの来所など、こどもの一人ひとりの心身の状態に応じた対応・配慮が不足していたとの指摘が多くみられました。
- ・ 事故発生時に被害を最小限とする対策が不十分、受傷後の判断の遅れを指摘する意見も一定数ありました。

こうした「変化する状況」の中で、すべての危険を大人が先回りして取り除くことは不可能ですし、これを行うことが育成支援の本質でもありません。

事故は、環境(物理的な状況)と行動(人の動きや心理)の相互作用によって引き起こされます。育成支援においては、この両者へのアプローチ、すなわち「大人が安全な環境を整える」ことに加えて、「こども自身が危険に気づき、考え、判断し、行動できるようになること」が重要になります。

この力を、本資料では「危険回避能力」と呼びます。



なお、放課後児童クラブ運営指針解説書では、育成支援の留意点として、こどもの危険回避能力の向上を支援することが明記されています。

### 第3章 放課後児童クラブにおける育成支援の内容 1. 育成支援の内容

⑧こどもが安全に安心して過ごすことができるように環境を整備するとともに、緊急時に適切な対応ができるようにする。

こどもが危険に気付いて判断したり、事故等に遭遇した際に被害を最小限にしたりするための安全に関する自己管理能力を身に付けられるように援助する。

放課後児童クラブでは、こども一人ひとりが身に付けている安全についての自己管理能力を把握して、「こどもの自己管理能力を生かすことができること」「そのこどもが学習することによって理解できること、習得することが可能なこと」「放課後児童支援員等が直接危険からこどもを守ることを、適切に組み合わせて対応する必要があります。こどもが遭遇する危険は、こどもの発達段階や、こどもが置かれている状況や行動の内容によっても異なります。そのため、こども一人ひとりの発達の状況、健康の状況等を把握した上で、それぞれに対応した適切な援助のあり方を考えていくことが求められます。

また、遊びの場面では、こどもの好奇心や意欲も大切にしながら、危険なことについてこども自身が考え、判断できるよう援助していくことが求められます。そのため、想定される危険の内容によっては、安全を確保するための行動のあり方についてこども自身が学ぶ機会を設けることも望まれます。

こども家庭庁「放課後児童クラブ運営指針解説書」

## ▶こどもの危険回避能力とは？

既存の学術研究等の内容と、「適切な遊び及び生活の場を与え、こどもの状況や発達段階を踏まえながら、その健全な育成を図る事業」である放課後児童クラブの事業目的とを踏まえると、放課後児童クラブとして重視すべきこどもの危険回避能力とは、以下の2つの要素により構成されるものと整理できます。

### 危険予知能力

- ・ 目の前やこれからの行動の中にどんな危険が潜んでいるか、危険な状態になりそうかどうかを見抜き、予測する力。

### 事故対応能力

- ・ 実際に危険な出来事が起きてしまったとき、自分の身を守りながら被害の広がりを抑え、周囲の大人に知らせる、友達を助けるなど、適切な対応をとる力。

危険はときに、遊びの楽しみの要素で冒険や挑戦の対象となり、こどもの発達にとって必要な危険性は、遊びの価値のひとつでもあります。こどもは遊びの中で小さな失敗やヒヤリとする経験に遭遇し、そうした経験への対応を学ぶことで危険を予測し、事故を回避できるようになります。危険な出来事に遭遇したときに、それに対処することで被害を最小限にとどめることができるという学びも重要です。

したがって、こどもの遊びや活動に付帯する危険について、こどもが乗り越えることのできる危険か否かを見定めながら、その活動を見守ることによって、こどもが自らの経験を通じて学んでいくプロセスを支えることが、放課後児童支援員に求められる役割です。



ひとくちに「危険」と言っても、その受け止め方は、こどもの年齢や発達段階によって大きく異なります。同様に、危険を避けるための大人の指示を理解し、行動に移す力にも個人差があります。

放課後児童支援員がこどもの発達特性を理解することは、適切な声かけや関わりのスタートラインとなります。

### こどもの体力の発達

体力面では、複数の学術研究などにより、近年こどもの体力・運動能力の低下が指摘されています。それに伴って、こどもの事故や怪我の増加も指摘されています。その要因として、身体活動量・運動量の減少に加え、幼児期における基本的な動きの未習得が挙げられています。<sup>1,2,3</sup>

### こどもの視野・視覚の発達

大人の平均的な水平(左右)視野は150度程度、垂直(上下)視野は120度程度である一方、6歳児の平均的な水平(左右)視野は90度程度、垂直(上下)視野は70度程度とされています。こどもの視野の狭さを理解したうえで安全対策が求められます。<sup>4</sup>

### こどもの心理機能の発達

#### 【小学校低学年】

- ・ 幼児期の特徴を残しながらも、「大人が『いけない』と言うことはしてはならない」といったように、大人の言うことを守る中で、善悪についての理解と判断ができるようになる。また、言語能力や認識力も高まり、自然等への関心が増える時期である。<sup>5</sup>
- ・ 重視すべき課題としては、「人として、行ってはならないこと」についての知識と感性の涵養や、集団や社会のルールを守る態度など、善悪の判断や規範意識の基礎の形成等がある。<sup>5</sup>
- ・ 遊び自体の楽しさの一致によって群れ集う集団構成が変化し、そこから仲間関係や友達関係に発展することがある。ただし、遊びへの参加がその時の気分が大きく影響するなど、幼児的な発達の特徴も残している。<sup>6</sup>

また、低学年児童は「やってみたい」が先に立ち、危険のイメージが十分に持てないことが多くあると考えられます。そして、やってはいけないこと/守らなければならないルールを自分ごととして理解する力が未成熟な場合もあります。ただし、放課後児童支援員等が遊び方やルールを具体的な手本を示しながらわかりやすく伝達すれば、それを守ろう/実践しようとする行動をとることもできそうです。

#### 【小学校中学年】

- ・ 道徳的な判断も、結果だけに注目するのではなく、動機を考慮し始める。遊びに必要な身体的技能がより高まる。同年代の集団や仲間を好み、大人に頼らずに活動しようとする。他者の視線や評価に一層敏感になる。<sup>6</sup>
- ・ 言語や思考、人格等のこどもの発達諸領域における質的变化として表れる「9、10歳の節」と呼ばれる大きな変化を伴っており、特有の内面的な葛藤がもたらされる。<sup>6</sup>

行動範囲や遊び方が広がる中で、友達と遊びを考えたりするようになる時期と考えられます。スリルを求める気持ちも強くなり、「ちょっとくらいなら大丈夫」と無理をしてしまうこともありそうです。

#### 【小学校高学年】

- ・ 物事をある程度対象化して認識することができるようになる。<sup>5</sup>

- ・ 集団の規則を理解して、集団活動に主体的に関与したり、遊びなどでは自分たちで決まりを作り、ルールを守るようになる一方、ギャングエイジとも言われるこの時期は、閉鎖的な子どもの仲間集団が発生し、付和雷同的な行動が見られる。<sup>5</sup>
- ・ 重視すべき課題としては、他者の視点に対する理解、集団における役割の自覚や主体的な責任意識の育成等がある。<sup>5</sup>

身体能力が高まり、危険を認識したり、ルールを守る力が養われる一方で、「自分は分かっている/できる」という自信から、危険を過小評価してしまうこともあると考えられます。危険を予測する視点を共有したり、ときに「安全を守る側」としての役割を持ってもらうことが、危険回避能力の育ちにつながる可能性があります。

もちろん、実際には発達のスピードや得意・不得意は子どもによってさまざまです。

「この学年だからこう」と決めつけるのではなく、一人ひとりの様子を丁寧に観察しながら、「今、この子はどんなふう危険をとらえているだろう?」と想像することが、関わり方を考えるうえでの第一歩になります。

なお、年齢や発達段階によって危険回避の能力は様々であることを前提に、小学生の年齢で判断・予測が困難な危険については、放課後児童クラブが責任を持って予防・回避するための対応を講じる必要があります。

#### 参考文献

- 1 横谷智久・野口雄慶・杉浦宏季(2017)幼児における認知・判断・反応能力と体力との関係 日本体育測定評価学会, 16(0), 43-48
- 2 中村和彦・武長理栄・川路昌寛・川添公仁・篠原俊明・山本敏之・山縣然太郎・宮丸凱史(2011)観察的評価法による幼児の基本的動作様式の発達 発育発達研究, (51), 1-18
- 3 日本学術会議(2017)提言 子どもの動きの健全な育成をめざして～基本的動作が危ない～日本学術会議健康・生活科学委員会 健康・スポーツ科学分科会
- 4 東京都「東京都版チャイルドビジョン(幼児視界体験メガネ)」[https://www.fukushi.metro.tokyo.lg.jp/kodomo/shussan/nyuyoji/child\\_vision](https://www.fukushi.metro.tokyo.lg.jp/kodomo/shussan/nyuyoji/child_vision) (2025年9月18日アクセス)
- 5 文部科学省 (2009)「子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題. 子どもの徳育に関する懇談会(第11回)配布資料」[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/053/shiryu/attach/1282789.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/shiryu/attach/1282789.htm)(2025年9月18日アクセス)
- 6 こども家庭庁(2025)放課後児童クラブ運営指針 [https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic\\_page/field\\_ref\\_resources/0abf2f27-1ebe-4fa2-bab8-362dd67ffc4b/4949acac/20250127\\_policies\\_kosodateshien\\_houkago-jidou\\_hourei-tsuuti\\_55.pdf](https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/0abf2f27-1ebe-4fa2-bab8-362dd67ffc4b/4949acac/20250127_policies_kosodateshien_houkago-jidou_hourei-tsuuti_55.pdf) (2025年9月18日アクセス)

### Column 3

## 学校⇔放課後児童クラブ⇔家庭での生活の連続性の中で育む 危険回避能力

こどもの生活は放課後児童クラブの中だけに留まることなく、学校や家庭と連続し、また地域の中に位置付けられるものです。したがって、危険回避能力も、放課後児童クラブだけがその育成の担い手になるわけではなく、家庭や地域における遊びとの連関、あるいは相乗効果によって育まれていくべきです。

これを実現するためには、保護者に対して、こどもの危険回避能力を放課後児童クラブだけでなく「学校や放課後児童クラブ、家庭、地域での生活全体」の中で向上させていくことの重要性を伝えるとともに、放課後児童クラブにおける危険回避能力向上のための活動等に関して趣旨目的、活動内容を説明し、理解と協力を得ることが必要です。そして、活動結果等を踏まえてこどもの発達上の課題を伝えるなどにより、こどもの発達の実際に即した連続性のある遊びが可能となるよう支援することが望まれます。同時に、これらの活動は、学校にも伝え、こどもの危険回避能力に関する共通理解を醸成することが大切です。

たとえば、危険回避能力向上のための KYT(危険予知トレーニング)の活動について、保護者向けの「入所のしおり」や入所説明会で説明したり、活動結果を保護者向けのお便りに掲載したり、小学校との定期的な連絡会で活動内容・結果を報告するなどの取組が考えられます。

## ▶大人の「危ない」と、子どもの「楽しい」のズレに気づく

放課後児童支援員が「ここは危ないから、子どもを近づけないようにしよう」と考えている場所が、子どもにとっては「ワクワクする遊び場」に見えていることがあります。

たとえば、鬼ごっこをしている場面を想像してみてください。

放課後児童支援員は「遊具から子どもが落ちないか」を心配しているかもしれません。

一方で、子どもは「遊具に登れば、鬼から逃げ切れる」「高いところに登るとドキドキして楽しい」と考えている可能性があります。

このように、同じ場面を見ていても、大人と子どもでは、見えている世界や大切にしていること(フレーム)が大きく異なります。

この「フレームの差」に気づかないまま、放課後児童クラブの安全対策を「大人が良かれと思って一方的に決める」「ルールで縛る」だけでは、子どもにとっては納得感のない、守られにくい約束になってしまいます。結果として、子どもの実態からズレた対策となり、空回りしてしまうことも少なくありません。



これに対して、「子どもにはどう見えているのか」「何が楽しくて、その行動をしているのか」を理解しようとするところから出発すると、安全対策のあり方は変わっていきます。子どもの視点を踏まえ、たうえで、「どうすれば安全に楽しめるか」を子どもと一緒に考え、ルールや工夫を共に創り上げていくことが、実効性のある対策につながります。

この転換がなければ、子どもは「言われたから守る」という受け身の姿勢から抜け出すことができません。「なぜ危ないのか」「どうすれば続けられるのか」を自ら考える経験がなければ、危険回避能力は十分に育っていかないかもしれません。

まずは、放課後児童支援員等自身が、「自分たちが見ている世界と、子どもが見ている世界は違うかもしれない」と意識すること。そこから、子どもの危険回避能力を共に育てる関わりが始まります。

こどもの心身の状態や事故のリスクは、その日の体調や学校での過ごし方、友達との関わりなどによって日々変化し、個人差も大きいものです。

しかし、時期や天候などの外部環境から、ある程度こどもの状態を予測できる場合もあります。以下に、こどもの心身に変化を及ぼし、事故のリスクを高める要因の例を紹介します。

- ・ **学校行事の反動**: 運動会や音楽会などの練習が続いたあとは、抑制されていた「自由に身体を動かしたい」という欲求が一気に高まります。特に静的な活動(音楽会や式典練習など)のあとは、反動で激しく走り回りたい傾向があります。
- ・ **天候(特に雨の日)**: 外遊びができないストレスから、室内で通常よりも激しい遊びやリスクのある行動をとる傾向があります。加えて、室内が密集状態になることや、湿気で床が滑りやすくなるなど、環境的にも事故のリスクが高まります。
- ・ **年度始め・年度末の心理状態**: 年度始めは、新しい環境や人間関係への緊張、設備への不慣れさから事故が起きやすくなります。一方、年度末は、慣れからくる油断や進級・修了に向けた解放感(あるいは不安)から行動が大胆になりやすく、ダイナミックな遊びによる事故が懸念されます。
- ・ **冬場の服装による制限**: フードや紐のついた服、分厚い上着などは、遊具等への引っかかりの原因となります。また、厚着によって身体が動きにくくなり、転倒時にとっさに手が出ないなどのリスクも生じます。

## ■ 実践しよう！

### こどもと共に育てる、安全が守られた放課後児童クラブ

#### ▶実践の持つ意味、重要性

放課後児童クラブとしての組織的な安全対策を前提としながら、育成支援を通じてこどもの危険回避能力を育んでいくうえで最も大切なのは、この考え方を、日々の放課後児童クラブの生活や遊びの中に落とし込んでいくことです。

特別なプログラムや大がかりなイベントを行う必要はありません。日ごろの活動やこどもとの対話の場の一環として、「危険について一緒に考える」「安全に楽しむ工夫を話し合う」といった機会を少しずつ取り入れていくことから始められます。

#### <まずはここから…実践のための2つのアプローチ>

こどもの危険回避能力を育むための具体的なアプローチは、大きく分けて「①危険を予測し、意見を述べる」と「危険を記録し、共有する」の2つの方向性があります。

### アプローチ①:危険を予測し、意見を述べる

放課後児童クラブのいろいろな場面について、「どんな危険が潜んでいるか」を、こども自身に考えてもらう方法です。一般的な写真やイラストを使ったり、あるいは実際の放課後児童クラブの見取り図、活動場面などを見ながら、

- ・ ここには、どんな危ないことが起きそうかな？
- ・ どんなときにケガしそう？
- ・ どうすれば、安全に遊べそうかな？
- ・ 実際に事故が起きたらどうする？

といった問いかけをし、こどもから出てきた意見を受け止めながら対話を進めていきます。

このアプローチを通じて、こどもは危険を見つける目(危険予知能力)を少しずつ育んでいきます。また、「自分の意見を伝え、友達と話し合う」経験は、集団の中で安全を守り合う力にもつながりますし、「実際に事故が起こった場合には、どうすれば良い？」ということまで話し合えると、事故に遭遇した際に適切な対応をとる力(事故対応能力)の醸成にもなります。

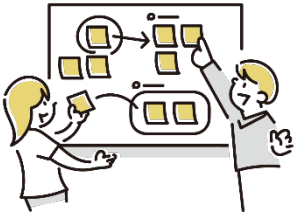
放課後児童支援員等にとっては、自らが感じる危険と、こどもが感じる危険とのズレに気づき、組織としての安全管理体制を見直す契機となります。

## アプローチ②:危険を記録し、共有する

もうひとつのアプローチは、実際に起きた「ヒヤリとしたこと」「ケガをしたこと」「危ないと思ったこと」を、「見える形」に記録していく方法です。

たとえば、放課後児童クラブ内の地図や写真に、「ここでこんなことがあった」「ここが危なかった」と書き込む「ヒヤリハットマップ」を作る取組が考えられます。

自分の体験だけでなく、友達の経験からも学ぶことで、



- ・ 「この場所には、こういう危険があるんだ」という具体的なイメージ
- ・ 「危険は誰にでも起こりうる、身近なものだ」という実感

が育ちます。結果として、放課後児童クラブ全体の安全意識が高まり、こども同士で注意し合う雰囲気づくりにもつながります。

### ▶楽しく実践。アクティビティ・キットを活用した学び

「やってみたい気持ちはあるが、具体的にどう進めればよいかわからない」

「自分たちだけでツールを作るのは難しい」

このような悩みをもつ放課後児童クラブ向けに、こどもが楽しみながら危険回避能力を身につけるための「アクティビティ・キット」を作成しました。

このキットには、次のような内容が含まれます。

- ・ 放課後児童クラブの生活及び遊びを想定した KYT(危険予知トレーニング)
- ・ 放課後児童クラブで起きた/起こりそうな(ヒヤリハットを含む)事故を可視化・共有する安全マップの作成

本キットは、令和7年度子ども・子育て支援調査研究事業「放課後児童クラブにおける事故防止(こどもの危険回避能力向上)」の一環として作成したものです。放課後児童クラブにおいて、こどもの危険回避能力を育む活動を検討・実施される際の一助として、ぜひご活用ください。

## ▶ 育成支援の気づきを、施設の安全環境改善へ

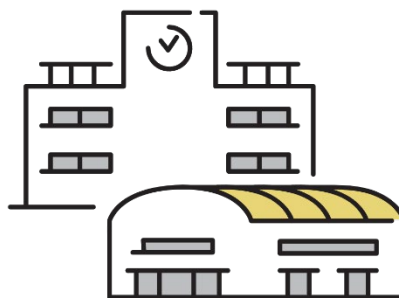
こどもの危険回避能力を育むための KYT(危険予知トレーニング)や安全マップ作成は、こどもの危険回避能力向上だけでなく、放課後児童支援員にとっても新たな気づきを得る機会となります。こどもと一緒に「危ない」と感じるものやことを探し、対話を重ねる中で、これまで大人の視点だけでは見過ごしていた危険箇所や、こどもが魅力を感じるリスクの高い行動が、具体的に明らかになるでしょう。

放課後児童クラブでは、こうした活動を通じて得た貴重な気づきを、日々の声かけや見守りの強化・職員配置の工夫といったソフト面の対応に留めてはいけません。特に、施設の構造や設備・遊具等の不備・老朽化といったハード面が事故の誘因となっている場合には、その環境そのものを改善することが不可欠です。

その際、放課後児童クラブ内の工夫で対応できる危険箇所(例:家具等の配置変更、コーナーガードの設置等)は、速やかに改善すべきです。しかし、遊具の修繕・交換や、施設の構造的な改修など、放課後児童クラブ単独での対応が困難な課題も少なくありません。

そのような場合には、市区町村と情報連携し、施設・設備の安全環境改善に努めることが求められます。これは、こどもの命と安全を預かる者としての重要な責務です。

こどもと一緒に実施した KYT 等の活動内容を具体的に共有しながら、「どのような状況で、どのような事故が起こりうるか」を客観的に整理して、自治体に報告・提案することが有効です。育成支援の現場から得られた気づきを、施設の安全環境整備へとつなげる好循環をつくることで、こどもがより一層安全に過ごせる放課後児童クラブを実現していきましょう。



放課後児童クラブにおける事故防止(こどもの危険回避能力向上)に関する調査研究 委員(五十音順・敬称略)

氏名	所属
植木 信一	新潟県立大学 人間生活学部子ども学科 教授
金坂 尚人	特定非営利活動法人S-pace 神戸市立六甲道児童館 館長
木宮 敬信	常葉大学 教育学部 教授
鈴木 瞬	金沢大学 人間社会研究域 学校教育系 准教授
高野 直美	群馬パース大学 看護学部 看護学科 講師
高野 由美子	世田谷区役所 子ども・若者部 児童課 課長補佐
塚原 星子	世田谷区役所 子ども・若者部 児童課 課長補佐

---

放課後児童クラブ安全管理ガイド

－放課後の安全をみんなで守るための「危険回避能力」



令和7年度子ども・子育て支援調査研究事業

放課後児童クラブにおける事故防止(こどもの危険回避能力向上)に関する調査研究

2026(令和8)年3月発行

発行・編集／みずほリサーチ&テクノロジーズ株式会社

社会政策コンサルティング部

〒100-8176 東京都千代田区大手町1-5-5

TEL 03-5281-5276